

国語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、14 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の A・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合は、**、や。や** などそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 映画館で不朽の名作を鑑賞する。
- (2) 長寿命電池は煩わしい交換の手間を省く。
- (3) 予報によれば今週は曇天の日が続くらしい。
- (4) 友人の斬新なアイデアに感心する。
- (5) 地区予選に向けて部員の士気を鼓吹する。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 東京にいる娘にキョウリの名産品を送る。
- (2) 師匠が弟子に秘伝の技をサズける。
- (3) 気象衛星の軌道のゴサを修正する。
- (4) アマチュアの将棋大会でトウカクをあらわす。
- (5) リーダーには人の上に立つキリヨウが必要である。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

元次郎は、友人の巖とその従妹のみね子に魚取りに行こうと誘われた。しかし当日巖は現れず、みね子が見守る中、元次郎は川の中へと入っていった。

やたらに水をかき廻しても、魚は取れないということが元次郎にもわかった。魚は動物である。敵の侵入を本能的に察知して、いかにそこが狭いところでもじょうずに逃げた。魚を取るには、まず魚を一か所に追いこんでから網を入れねばならなかった。巖がいたらいいがな、と思った。だが、巖がいなくても、獲物は結構あった。コイ、フナ、ナマズなどが取れだすと、おもしろいように取れた。元次郎がすくい上げるたびにみね子は、取れた、取れた、と大きな声を上げた。

元次郎は大胆になっていた。^①小さな水たまりで小物を追い廻すよりもみね子のバケツにはいらぬような——みね子が金切り声を上げるような大物をつかまえてやるうと思つた。

大物は川を中心にいそいだつた。川の中の水は流れてはいなかった。よどんだままになっていた。そこに大物がいることはわかつていたが、やたらに網を入れてもどうにもならなかった。そこはあまりにも広すぎた。深さもあつた。

元次郎は川下に向つてくだりながら、大物のいそうなところを捜した。川を中心の水たまりと並行して三間ほどの細長い水たまりがあつた。そこにはまだ人の足跡はなかつた。

その細長い溝にはなにか大物がいそうな気がした。彼は川下から網を入れた。溝はせまいから、そうして追いついていけば魚は逃げ場はなかった。

網を溝に入れたと同時に、溝の中に波が立った。そんなことはいままでないことだった。元次郎は思わず、掬い網を手元に引いたほど、その波紋は不気味だった。魚がいるという感じではなく、なにかもつと大きな、たとえば川瀬でもひそんでいそうな気配だった。川瀬はすでに伝説の中の（この地方では明治の中期に絶滅した）動物であったが、話には聞いていた。

元次郎は岸にいるみね子の方を見た。みね子も溝の中の異常を見て取ったようだった。⁽²⁾ それまでになく心配そうな顔をしていた。

元次郎は静かに網を入れて、少しずつ上流の方へ向って動かしていった。なにかいるはずだ。それがなにかは知らないが、いることは間違いない。網は溝の中ほどまでできたが、溝の中は静かであった。彼ははや大胆に網をおし上げた。あと一メートルほどで、その溝がおしまいになるところまで来たときであった。

水中から、水しぶきとともに光るものがおどり出した。その瞬間、元次郎は、泥水を顔いっぱいにかぶった。泥水が目にはいつて、相手をはつきり見定めることはできなかつた。銀色に光るものが動いていることだけはわかつたが、それが魚だとは思えなかつた。彼は反射的に手で顔の泥を拭いた。そこに巨大な魚がいた。およそ一メートルもある鯉が、溝からはね出して、泥の上を尾を振りながら逃げようとしていた。逃げる方向は間違えてはいなかつた。川の中心の水たまりまでおよそ、数十センチあつた。元次郎の掬い網で取れるようなものではなかつた。それは

あまりにも大物すぎた。元次郎は網を捨てると、逃げようとする大魚をおさえに掛つた。その手を尾でたたかれた。火箸でも当てられたように痛かつた。その痛みが元次郎を勇気づけた。

「こんちくしょうめ。」

元次郎がそういうと、からだごと大鯉にぶつかっていた。元次郎の胸の下に大鯉がはいった。苦しうにあがく鯉の口と、澄んでうつろな大鯉の目がすぐそこにあつた。

⁽³⁾ 「元次郎さん、やめて。それは諏訪湖の主かもしれないから、はなしてやめて。」

みね子が叫んだ。みね子がなにをいっているかわからなかつたが、大魚を胸の圧力でおさえこんで、大魚の疲れるのを待とうとしている元次郎の耳に、諏訪湖の主という声だけが聞えた。元次郎は、そのままの姿勢で、みね子の方を見た。

「ゆるしてあげて、ね、元次郎さん、はなしてあげて。」

みね子の哀願をこめた叫び声が、元次郎の心を衝いた。

それまでみね子は元次郎の掬い取った小魚をよるこんでバケツに受け取っていた。小魚を取ること、大鯉を取ること、根本的には動物を生け取りにすることであつたが、小魚を取ってバケツに入れるにはなんの罪悪感もなかつた。だが、元次郎の体当りを受けて彼の胸の下でもがき苦しんでいる一メートルもある大鯉を見ると、そこに殺戮を行おうとする人間と、殺されまいともがき苦しむ動物とがはっきりと対照されたのであつた。

みね子が大鯉をはなしてやれといったのは、そこに生命をはっきり見たからだつた。生命の断続に抵抗したいからだつた。

(4) はなしてやれといわれても、元次郎はすぐには力をゆるめようとはしなかつた。

彼は、まだ見たことのない川瀬の化け物でも押えつけている気持だつた。はなしてやる気も、許すつもりもなかつたが、みね子のことばにさからうわけにもいかなかつた。元次郎はいくらからだの力を抜いて、みね子に妥協の余地があるかないかを見定めるようからだをおこしかけた。

そのすきを見て、大鯉がはねた。目の前で、三十センチほど跳躍した大鯉は、一度は泥の上に落ちたが、その次の跳躍で、水の中に姿を消した。大鯉が逃げたのと、ほとんど同じぐらいに、鐘が鳴った。ふたたび放水するという知らせであつた。

元次郎は岸に上つて、せわしく呼吸をついていた。みね子はバケツをそこに置くと、川下へかけくだつて行つた。大鯉の安否を気づかっているようだった。まもなく水の流れる音がした。干された川には満々と水がたたえられて、みね子の家の舟は水の上に浮上した。

「逃げたわ、諏訪湖の主は諏訪湖に帰つたわ。」

みね子がいった。なにか思いつめたような顔をしていた。みね子の目に涙が光っていた。

(新田次郎「思い出のともしび・白い夏」による)

〔注〕 間——長さの単位。一間は約一・八メートル。

川瀬——水辺に住む小動物。

〔間1〕 (1) 小さな水たまりで小物を追い廻すよりみね子のバケツにはいら

ないような——みね子が金切り声を上げるような大物をつかまえてやろうと思つた。とあるが、このときの元次郎の心情を説明したものである。次のうちではどれか。

ア 小さな魚に物足りなさを感じ始めたみね子が驚くような大きな魚をつかまえて、満足させたいと思つた。

イ 無邪気に騒ぐみね子の想像をはるかに超える大きな魚を捕らえて、心の底から怖がらせたいと思つた。

ウ 歓声を上げてはしゃぐみね子が見たこともないような大きな魚を取つて、もつと喜ばせたいと思つた。

エ 小さな魚にすら興奮しているみね子に大きな魚を見せて、巖をしのぐ腕前であると感じさせたいと思つた。

〔問2〕⁽²⁾ それまでになく心配そうな顔をしていた。とあるが、このときのみね子の心情を説明したものととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 希少な生き物を捕えることは地域の自然にも影響を及ぼしかねず、どうやって元次郎を引き止めればよいかと思索している。
- イ 今まで自信に満ちていた元次郎が急に弱気に転じたことに驚くとともに、大物が現れたら自分も加勢しようと緊張している。
- ウ 川獺のような伝説の動物に危害を加えたら、自分達のみならずその周囲の人々にも天罰が下るのではないかと恐れている。
- エ 溝の中が波立つほどの大きな獲物にはかつて出会ったことがなかったもので、その得体の知れなさに不安を覚えている。

〔問3〕⁽³⁾ 「元次郎さん、やめて。それは諏訪湖の主かもしれないから、はなしてやって。」とあるが、みね子がこのように言った理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 元次郎と大鯉の格闘を目の当たりにして、今もがき苦しんでいる生き物こそが湖の主であると確信し、罪悪感に打ちのめされたから。
- イ 一メートルもある大鯉との格闘に苦しむ元次郎の姿に、経験したことの無い危険を感じ、大けがをするのではないかとおびえたから。
- ウ 激しく格闘する元次郎と大鯉の姿を見て、躍動する生命の重さに打たれ、尊い命を奪うことのむごさに耐えられなくなったから。
- エ 無我夢中で大鯉と格闘する元次郎に、動物の命を軽んじる人間のおごりを見て、希少な生物を保護したいという使命感に目覚めたから。

〔問4〕⁽⁴⁾ はなしてやれといわれても、元次郎はすぐには力をゆるめよう

とはしなかった。とあるが、このときの元次郎の心情を説明した

ものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 元次郎を心配して放せと叫ぶみね子の言葉に納得がいかず、精根尽き果てるまで大鯉との格闘を続けたいと興奮している。

イ みね子が必死に何かを訴えようとしていることに気づきつつも、大鯉をねじ伏せることにかつてない高揚感を覚えている。

ウ なぜみね子に非難されるのか理解できず、大鯉を止めさえすれば機嫌を直して許してくれるだろうと期待している。

エ 格闘を制止する声は聞こえるものの、そもそも大鯉の捕獲を強く望んだのはみね子の方ではないかととまどっている。

〔問5〕 この文章の表現の工夫について説明したものとして最も適切な

のは、次のうちではどれか。

ア 文章中の主語を可能な限り省略して躍動感を生み出したことで、登場人物と読者との距離が縮まり、元次郎の勇敢な振る舞いに共感しやすくなっている。

イ 大鯉の生命を気づかうみね子と元次郎の独白を効果的に挿入したことで、二人の自然や生き物の命に対する尊敬の念が読者に伝わりやすくなっている。

ウ 当初は得体が知れなかった生き物の正体を徐々に解き明かしていくような手法で描くことで、元次郎との格闘場面に読者が引き込まれやすくなっている。

エ 浅はかなみね子の表情やしぐさを丁寧に描写したことで、みね子と対照的な存在である元次郎の思慮深い言動や心の動きを読者が理解しやすくなっている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

ヒトの身体を構成している分子は次々と代謝され、新しい分子と入れ替わっている。それは脳細胞といえども例外ではない。

脳細胞は一度完成すると増殖したり再生することはほとんどないが、それは一度建設された建造物がずっとそこに立ち続けているようなものではない。脳細胞を構成している内部の分子群は高速度で変転している。その建造物は至る部分でリフォームが繰り返され、建設当時に使われていた建材など何一つ残ってはいないのである。

つまり、分子レベルの物質的基盤は、脳のどこを探してもない。あるのは絶え間なく動いている状態の、ある一瞬を見れば全体として緩い秩序を持つ分子の「淀み」である。

そこには因果関係があるのではなく、平衡状態^{*}があるにすぎない。私たちが「記憶の想起」と呼んでいるものも、実は一時点での平衡状態もたらず効果でしかない。

私たちは五年前や一〇年前の一年の過ぎ方がどうだったかなどと思いつ出すことすらできない。過去は恐ろしいほどボンヤリしたものでしかないのである。

仮に「五年前にはこんなことがあり、一〇年前にはあんなことがあったなあ。」と思いつ出すことはできても、それは日記なり写真なり記念品があるから、それを手がかりに過去の順番をかるうじて跡づけられるのであって、感覚としては、一〇年前のことが五年前のことよりも、より遠い昔のことだという実感を持つことはできない。

(1)

逆⁽¹⁾に五年前のことが一〇年前よりも新鮮な記憶としてあるという実感も実はない。人は年齢を重ねるごとに時間経過の順に物事を記憶しているのではなく、実は過去をおぼろげながらにしか想起できはしないのだ。

ここに記憶というものの正体がある。人間の記憶とは、脳のどこかにビデオテープのようなものが古い順に並んでいるのではなく、「想起した瞬間に作り出されている何か」なのである。

つまり過去とは現在のことであり、懐かしいものがあるとするれば、それは過去が懐かしいのではなく、今、懐かしいという状態にあるにすぎない。

^{*}ビッドなものとすれば、それは過去がビッドではなく、たつた今、ビッドな感覚の中にあるということである。

私たちが鮮烈に覚えている若い頃の記憶とは、何度も想起したことがある記憶のことである。あなたが何度もそれを思い出し、その都度いとおしみ、同時に改変してきた何かのことなのである。

ではいったい記憶とは何だろうか。細胞の中身は、絶え間のない流転^{るてん}にさらされているわけだから、そこに記憶を物質的に保持しておくことは不可能である。ならば記憶はどこにあるのか。

それはおそらく細胞の外側にある。正確に言えば、細胞と細胞とのあいだに。神経の細胞（ニューロン）はシナプスという連繫^{れんけい}を作って互いに結合している。結合して神経回路を作っている。

神経回路は、経験、条件づけ、学習、その他さまざまな刺激と応答の結果として形成される。回路のどこかに刺激が入ってくると、その回路に電気的・化学的な信号が伝わる。信号が繰り返し、回路を流れると、回路はその都度強化される。

神経回路は、いわばクリスマスに飾りつけされたイルミネーションのようなものだ。電気が通ると順番に明かりがともり、それはある星座を形作る。オリオン座、いて座、こぐま座。

あるとき、回路のどこかに刺激が入力される。それは懐かしい匂いかもしれない。あるいはメロディかもしれない。小さなガラスの破片のようなものかもしれない。刺激はその回路を活動電位の波となって伝わり、順番に神経細胞に明かりをとす。

ずっと忘れていたにもかかわらず、回路の形はかつて作られたときと同じ星座となつてほの暗い脳内に青白い光をほんの一瞬、発する。

⁽²⁾たとえ、個々の神経細胞の中身のタンパク質分子が、合成と分解を受けてすっかり入れ替わっても、細胞と細胞とが形作る回路の形は保持される。

いや、その形すら長い年月のうちには少しずつ変容するかもしれない。しかし、おおよその星座の形はそのまま残る。

記憶分子は確かに実在していない。しかし、分子の代謝回転と記憶のあいだには奇妙な関係があるように思える。それは時間経過の感覚のことである。

一日が瞬またたく間に終わる。あるいは一年があつという間に過ぎる。子供の頃はもつともつと一年が（A）、充実したものだつたのに――。

なぜ大人になると時間が早く過ぎるようになるのか。誰もが感じるこの疑問は、ずっと古くからあるはずなのに、なかなか納得できる説明が見当たらない。この疑問について生物学的に考察してみよう。

ここで重要なポイントは、私たちが時間の経過を「感じる」、そのメカニズムである。物理的な時間としての一年は、三歳のときも三〇歳のときも同じ長さである。にもかかわらず、私たちは三〇歳のときの一年のほうをずっと（B）と感じる。

きも同じ長さである。にもかかわらず、私たちは三〇歳のときの一年のほうをずっと（B）と感じる。

そもそも私たちは時間の経過をどのように把握するのだろうか。自分がこれまで生きてきた時間をモノサシにして（あるいは分母にして）時間を計っているのだろうか。

でも、これは違う。私たちは自分の生きてきた時間、つまり年齢を、実感として把握してはいない。大多数の人は自分が「まだまだ若い」と思っているはずだし、一〇年前の出来事と二〇年前の出来事の「古さ」を区別することもできない。

一年があつという間に過ぎる。時間経過の謎は、実は私たちの内部にある、この時間感覚のあいまいさと関連している、というのが私の仮説である。それはこういうことである。

今、私が完全に外界から隔離された部屋で生活するとしよう。この部屋には窓がなく、日の出日の入り、昼夜の区別がつかず、また時計もない。

この中で、どのようにして私は時間の感覚を得ることができようか。⁽³⁾それはひとえに自分の「体内時計」に頼るしかない。だいたいこれくらいで一日二四時間。七回眠ったからおおよそ一週間が経たつただろう。もうそろそろ一カ月が経過した頃かな。そして……とうとう一年。

もちろん、このような生活が、たとえ衣食が足りたとしても、まともには続けられるとは思えないが、これはあくまで思考実験である。

私が三歳のとき、この実験を行って自分の「時間感覚」で「一年」が経過したとしよう。そして私が三〇歳のとき、もう一度この実験を行って「一年」を過こしたとする。いずれも自分の体内時計が一年を感じた

時点が「一年」ということである。それぞれの実験では、実際の物理的な経過時間を外界で計測しておくとする。

さて、ここが大事なポイントである。三歳のときに行った実験の「一年」と三〇歳のときに行った実験の「一年」では、どちらが実際の時間としては長いものになっただろうか。

意外に思われるかもしれないが、ほぼ間違いなく、三〇歳のときに感じる「一年」のほうが長いはずなのだ。なぜか。

それは私たちの「体内時計」の仕組みに起因する。生物の体内時計の正確な分子メカニズムは未だ完全には解明されていない。しかし、細胞分裂のタイミングや分化プログラムなどの時間経過は、すべてタンパク質の分解と合成のサイクルによってコントロールされていることがわかっていいる。つまりタンパク質の新陳代謝速度が、体内時計の秒針なのである。

そしてもう一つの厳然たる事実は、私たちの新陳代謝速度が加齢とともに確実に遅くなるということである。つまり体内時計は徐々にゆっくりと回ることになる。

しかし、私たちはずっと同じように生き続けている。そして私たちの内発的な感覚は極めて主観的なものであるために、自己の体内時計の運針が徐々に遅くなっていることに気がつかない。

だから、完全に外界から遮断されて自己の体内時計だけに頼って「一年」を計ったとすれば、三歳の時計よりも、三〇歳の時計のほうがゆっくりとしか回らず、その結果「もうそろそろ一年が経ったなあ。」と思えるに足るほど時計が回転するのには、より長い物理的時間がかかることになる。つまり三〇歳の体内時計がカウントする一年のほうが長いことになる。

さて、ここから先がさらに重要なポイントである。タンパク質の代謝回転が遅くなり、その結果、一年の感じ方は徐々に長くなっていく。にもかかわらず、実際の物理的な時間はいつでも同じスピードで過ぎていく。

だから？ だからこそ、自分ではまだ一年なんて経っているとは全然思えない、自分としては半年くらいが経過したかなーと思った、そのときには、すでにもう実際の一年が過ぎ去ってしまったているのだ。そして私たちは愕然がくぜんとすることになる。

⁴⁾つまり、歳をとると一年が早く過ぎるのは、実際の時間の経過に、自分の生命の回転速度がついていっていない。そういうことなのである。

(福岡伸一「新版動的平衡」による)

〔注〕 平衡——常に一定のあり方を保っていること。

ビビッド——生き生きとした様子。

〔問1〕⁽¹⁾ 逆に五年前のことが一〇年前よりも新鮮な記憶としてあると

いう実感も実はない。と筆者が述べたのはなぜか。最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 人間の記憶は、繰り返し想起されたものほど脳内の記憶分子に深く刻まれるため、記憶の鮮明さは経過時間の長短に比例するわけではないと考えたから。

イ 人間の記憶は、脳の記憶物質の中に保存されているが、脳細胞の子群は次々と入れ替わるため必ずしも時系列に並んでいるわけではないと考えたから。

ウ 人間の記憶は、五年を経過すると思い出すことが困難になり、一〇年前の出来事との新旧の違いが実感できなくなるほど不確かなものがあると考えたから。

エ 人間の記憶は、脳細胞中の特定分子によって時間経過の順に保持されているのではなく、想起すると同時にその都度作り出されるものがあると考えたから。

〔問2〕⁽²⁾ たとえ、個々の神経細胞の中身のタンパク質分子が、合成と

分解を受けてすつかり入れ替わっても、細胞と細胞とが形作る回路の形は保持される。とあるが、「細胞と細胞とが形作る回路の形は保持される」ことによって、具体的には何が「保持される」と筆者は考えているか。それを表す最も適切な語を、本文中から漢字二字でそのまま抜き出して書け。

〔問3〕 本文中の空欄（A）及び（B）にあてはまる語の

組み合わせとして最も適切なものを、次のうちから選べ。

- | | | | | |
|---|---|----|---|----|
| ア | A | 短く | B | 短い |
| イ | A | 短く | B | 長い |
| ウ | A | 長く | B | 短い |
| エ | A | 長く | B | 長い |

〔問4〕⁽³⁾ それはひとえに自分の「体内時計」に頼るしかない。とあるが、「体内時計」についての説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 「体内時計」は意識しなくても日中は心身ともに活動状態に、夜間は休息状態に切り替わる一定のリズムを有しているため、年齢を問わず感じる時間の長さはほぼ等しい。

イ 「体内時計」の時間経過は細胞内のタンパク質の分解と合成のサイクル速度によるが、三〇歳の「時計」よりも三歳の「時計」の方がゆっくりと回るため、子供は一年を長く感じる。

ウ 「体内時計」はタンパク質の新陳代謝速度によってコントロールされており、加齢とともに徐々に代謝速度が上がるため、歳をとると時間の経過を早く感じるようになる。

エ 「体内時計」の運針は歳をとると遅くなっていくため、三歳の「時計」がカウントする一年よりも、三〇歳の「時計」がカウントする一年の方が実際の時間としては長いものになる。

〔問5〕⁽⁴⁾ つまり、歳をとると一年が早く過ぎるのは、実際の時間の経過に、自分の生命の回転速度がついていけていない。そういうことなのである。とあるが、「時間の経過」についてあなたが日頃感じていることや考えていることを、具体例をあげて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

5 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

*ふそん
蕪村の有名な句に、

菜の花や月は東に日は西に

というのがあります。句の意味は、菜の花が一面に輝くように咲いているなか、時刻は夕暮れ時になって、東からは月が昇り、西には太陽が沈んでいくことだ、となります。ちなみに、夕方に東の空に出るのは、満月の頃の月です。つまり、東から昇ってくるのは白く丸い月で、それが赤々と燃えるような夕日に対置されているわけです。

描かれている光景を想像してみると、中央に菜の花畑、一方に昇る月、一方に沈む太陽というような、対照性の際立った立体的な図像が脳裏に浮かび上がってくるのではないのでしょうか。色という意味でも黄・白・赤と多彩で、構図・色彩ともに印象鮮明な一句と言えるでしょう。それもそのはず、蕪村は俳人というだけではなく、画家でもあったのです。しかも余技で絵を描いていたのではなく、一流の画家でした。

この句は完全に蕪村のオリジナルではないという指摘もなされています。

民謡に、

月は東に、*すばる 昴は西に、いとし殿御は真中*まんなかに（*山家鳥虫歌）

というのがあります。ここでは、中央に恋しく思っている殿方、東と西に月と昴星が配されています。なあんだ、ずいぶん似ている句があるんだなと思われるかもしれませんが、ちょっと待って下さい。たしかにこの民謡もそれなりに図像的ですが、蕪村はそこに二つの工夫を加えて、さらに構図に磨きをかけています。

一つ目の工夫は、「殿御」を「菜の花畑」に変えたところです。人間が句の中からいなくなつて、自然物だけになりました。⁽¹⁾結果として叙景的な感じが増しています。「殿御」が描かれていれば、その人へのいとおしさという人間的な感情が入ってきます。それはそれで、文学の大事な題材なのですが、この場合はそのような感情は冷静に排除され、自然物の美しさだけをクローズアップすることで、光景そのものが持つ客観的な美を表現しようとして成功しています。

もう一つの工夫は、「(A)」を「日」に変えたことです。「月」と「(A)」が対照されているよりも「(B)」と「日」が対照されている方が、なぜ構図的にまさっているのでしょうか。それは、たとえば天照大神あまてらすおおかみは日の女神で、その弟は月読尊つきよみのみことであるというように、日本文学の伝統の中で、空に浮かぶ星としては「(B)」と「(C)」という二者こそが最も重要なものとして認知されてきたからに他なりません。つまり、月・昴を月・日と変えたことによつて、堂々とした左右対称の光景が描き出せるわけです。画家兼俳人のすぐれた審美眼しんびがんがそこにはあります。⁽²⁾「山家鳥虫歌」という人々になじみの民謡を用いても、そこに自分らしさを投影させる。その好例が「菜の花や」の句なのです。

つづいて、一茶の句。こちらは、ひとつしか答えがないように思つて

いた句にもいろいろな解釈が成り立つという例としてあげます。

雀の子すずめそのけそのけ御馬が通る

という句は有名なので、皆さんご存知だと思ひます。

季語は「雀の子」、これは晩春の季語です。「そのけ」というのは、もともとは大名行列で「そこを退のき去れ」と言つて民衆を遠ざける時に用いられた格式ばつたことばでした。狂言「対馬祭つしままつり」にある「馬場退け馬場退け、お馬が参るお馬が参る」という表現を踏まえているという説もあります。

おおよその句意は、雀の子よ、そこをどきなさい、お馬さんがお通りだ、というのでしょうか。しかし、この句の解釈には先に述べたように諸説があるのです。

ここでは、そのいくつかを紹介してみましょう。まず川島つゆ『一茶俳句新釈』では、

畦道あぜみちなどに雀の子が三々五々下り立つて居る中を、馬曳うまひいて行く人の親おやしげな気持きもち。或は、傍観あらいしてゐる人の稍々ややはらくした気持が感ぜられる。

とあります。これだと、たんなる馬と雀の子の日常的な関係ということになります。それに対して、勝峯晋風しょうほうしんふう『一茶名句評釈』では、

子供が竹か木の棒をまたいで馬うまごっこしてゐる。それがお殿様のお通

りだぞ。「雀の子、そのけく」と馬上を気取る子供自身が呼びかけた様にした作意にも解釈される。

とあります。この説だと、馬が実際にいるのではなくて、竹馬などにまたがって遊んでいる子どもが雀の子に向かって言ったという内容になります。ユーモラスな雰囲気も漂って、のどかな光景の句として把握されています。

ところが、黄色瑞華『小林一茶』は、次のように述べています。

「御馬」は支配者階級たる武家の馬。その「御」という文字に、支配者の権力が象徴的に表現されている。それに対する「雀の子」、それは被支配者の位置や力を象徴するものと見てよからう。街道の両端に土下座して、武家の行列を見送る農民の姿は、まさに「雀の子」にも比すべく、あわれにも小さいのである。

ここでは、馬と雀の子という関係を武家と農民という関係に置き換えているわけです。最初に述べたように「そのけ」の本来的な語義は大名行列の際の人払いにあったわけですから、この黄色氏の説はそもそもそのことばの意味にまでさかのぼって捉えたものと言えるでしょう。ただし、ちよつとぎすぎすしているというか、ここまで「支配者の民衆への抑圧」という社会的な図式を読み取る必要があるのかどうか、少し疑問に思っています。

私としては、本当の馬ならぬ竹馬に乗った子どもが、雀の子相手に「そのけそのけ」と得意そうにえはっている、おどけた感じも汲み取れ

る光景という解釈が中庸を得ていて、落ち着きます。

ただ、文学の解釈には唯一絶対の正解があるわけではないのです。この一茶の「雀の子」という句に存在する多様な解釈は、いくつもの解をあてもないこうでもないと考える楽しみを私たちに与えてくれます。⁽³⁾そんな面白さも大切にしてほしいと思っています。

(鈴木健一「知ってる古文の知らない魅力」による)

〔注〕 蕪村——与謝蕪村。江戸時代の俳人。

昂——おうし座にある星団の名。

山家鳥虫歌——江戸時代の民謡集。

審美眼——美を見極める能力。

一茶——小林一茶。江戸時代の俳人。

中庸——考え方・行動などが一つの立場にかたよらず、極端

でないこと。

〔問1〕⁽¹⁾ 結果として叙景的な感じが増しています。とあるが、その説明

として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 俳句や短歌では通常用いられない心情描写をあえて用いることで、自然物の持つ絵画的な美しさをいっそう感じさせるということ。

イ 心情を表す言葉を取り除き自然物のみ焦点を当てたことで、光景が持つ客観的な美しさを更にきわ立たせているということ。

ウ 自然美に着目して主観を表現する語句を排除することで、逆に俳人の心象風景をより具体的に想像させる構成になったということ。

エ 対比的な構図を意図し古い民謡に使われた言葉を取り入れることで、新旧対照の面白さを加えることに成功しているということ。

〔問2〕 本文中の空欄（A）・（B）・（C）にあてはまる語

の組み合わせとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

- | | | | |
|---|-----|-----|-----|
| ア | A 月 | B 日 | C 昴 |
| イ | A 月 | B 昴 | C 日 |
| ウ | A 昴 | B 日 | C 月 |
| エ | A 昴 | B 月 | C 日 |

〔問3〕⁽²⁾ 「山家鳥虫歌」という人々になじみの民謡を用いても、そこに自

分らしさを投影させる。とあるが、その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア よく知られている民謡と似ているものの、画家ならではの構成力を語句の精選においても存分に発揮しているということ。

イ よく知られている民謡を意識的に取り込んだことで、大衆的な俳句の継承者であるという自負を示しているということ。

ウ よく知られている民謡を下敷きにし、そこに日本文学の伝統的な題材を重ねて感動を生み出すことに成功しているということ。

エ よく知られている民謡に独自の解釈を加えた上で、古代神話の要素を取り入れ新しく身近なものにしているということ。

〔問4〕⁽³⁾ そんな面白さも大切にしてほしいと思っけています。とあるが、

その説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 俳句の鋭くも気の利いた表現の中に、支配者階級に対する庶民のたくましい批判精神を探り当てることも、文学を味わう上での楽しみであるということ。

イ 俳句には普遍的な解釈が存在し、その解釈を見いだすことで身分や場所や時代を超えて、多くの人々と感動を分かち合う喜びが生まれるということ。

ウ 俳句の楽しみは一つの読みを作り上げることにより、多くの人と様々な視点から議論することで、それぞれの時代を代表する解釈が出来るということ。

エ 俳句の一つ一つの言葉には様々な解釈を加えることが可能であり、それを想像することが俳句を読む楽しさであるとともに、文学の魅力であるということ。

〔問5〕 蕪村の「葉の花や月は東に日は西に」の句と、一茶の「雀の子すずめ

そのけそこのけ御馬が通る」の句の表現の共通点について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 両方の句とも抽象的表現の過剰という弱点を背負いながら、人物を登場させず、後世に知れ渡る句となったということ。

イ 両方の句とも元となる表現の存在を指摘されながら、日常的な言葉を用い、後世に知れ渡る句となったということ。

ウ 両方の句ともおどけたユーモラスな雰囲気や漂わせながら、解釈の幅を広げ、後世に知れ渡る句となったということ。

エ 両方の句とも人生のものの悲しさを描きながら、初秋の情景を写実的によみ、後世に知れ渡る句となったということ。

5
〔問1〕
〔問2〕
〔問3〕
〔問4〕
〔問5〕

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

4									
〔問5〕								〔問1〕	
								〔問2〕	
									〔問3〕
									〔問4〕
									〔問5〕
									〔問6〕
									〔問7〕
									〔問8〕
									〔問9〕
									〔問10〕
									〔問11〕
									〔問12〕
									〔問13〕
									〔問14〕
									〔問15〕
									〔問16〕
									〔問17〕
									〔問18〕
									〔問19〕
									〔問20〕
									〔問21〕
									〔問22〕
									〔問23〕
									〔問24〕
									〔問25〕
									〔問26〕
									〔問27〕
									〔問28〕
									〔問29〕
									〔問30〕
									〔問31〕
									〔問32〕
									〔問33〕
									〔問34〕
									〔問35〕
									〔問36〕
									〔問37〕
									〔問38〕
									〔問39〕
									〔問40〕
									〔問41〕
									〔問42〕
									〔問43〕
									〔問44〕
									〔問45〕
									〔問46〕
									〔問47〕
									〔問48〕
									〔問49〕
									〔問50〕
									〔問51〕
									〔問52〕
									〔問53〕
									〔問54〕
									〔問55〕
									〔問56〕
									〔問57〕
									〔問58〕
									〔問59〕
									〔問60〕
									〔問61〕
									〔問62〕
									〔問63〕
									〔問64〕
									〔問65〕
									〔問66〕
									〔問67〕
									〔問68〕
									〔問69〕
									〔問70〕
									〔問71〕
									〔問72〕
									〔問73〕
									〔問74〕
									〔問75〕
									〔問76〕
									〔問77〕
									〔問78〕
									〔問79〕
									〔問80〕
									〔問81〕
									〔問82〕
									〔問83〕
									〔問84〕
									〔問85〕
									〔問86〕
									〔問87〕
									〔問88〕
									〔問89〕
									〔問90〕
									〔問91〕
									〔問92〕
									〔問93〕
									〔問94〕
									〔問95〕
									〔問96〕
									〔問97〕
									〔問98〕
									〔問99〕
									〔問100〕

200 100 25

A	B	C	D
---	---	---	---

(5)

(1)
(2)
(3)
(4)

3
〔問1〕
〔問2〕
〔問3〕
〔問4〕
〔問5〕

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

2	
(1) キョウウリ	
(2) サズける	ける
(3) ゴ	
サ	
(4) トウカク	
(5) キリョウ	
ウ	

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

1	
(1) 不	
朽	
(2) 煩わしい	わしい
(3) 曇	
天	
(4) 斬	
新	
(5) 鼓	
吹	

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

受 検 番 号

合計得点

※ 欄には、記入しないこと

解 答 用 紙 国 語